
或る北国の物語

鳩夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る北国の物語

【Nコード】

N0678I

【作者名】

鳩夜

【あらすじ】

とある北国が舞台となっている、遠い、遠い、昔の御話。

I・深淵の青年

雪の降る 遠い北の向うの国

名将という誉れに満ちた 若き青年がいた

敬われ 畏怖の念 持たされて 恐れられ

ただ一人 剣振るい 最強と 言われては

ただ一人 戦った 青年の 物語

権力も財産も 妙薬も不死の力も

彼は要らなかつたけれど

ただ一人 彼の愛する人のため

彼は 剣を手に…

ただ一人 彼の愛する国のため

彼は 敵に死を…

武勲 噂 だけは遠い果てまで風と共に

物語を 語らぬ者はいなく

彼は 英雄と呼ばれ…

青年は 恋をする その相手 秘めやかに

お互いに 愛を持ち お互いに 手をとって

ただ二人 秘密とし 微笑んで 口付けする

揺らぎゆく 泡沫の 愛し合う 物語

彼の愛する その人は身分いと高き者

国の王の娘

ただ無邪気で 青年と共にいることが ただ楽しくて

ただ無垢で 青年と共に笑うことが ただ嬉しくて

引かれ合う 惹かれ合う 二人の想いは

密かに育ち…

王女のため 愛する人のため 彼は 剣を…
王女のため 彼女の国のため 彼は 剣を…

時流れ 王は死に その息子 王となり
青年と 仲の良い その男 王となり
ただ一人 我が俤で 横暴な 王により
狂いだし 滅びゆく 北国の 物語

国は戦を向かえ 数々の領地 広げては
兵たちを 駆り出して 疲労を無視し 王の自我により
怒りを買ひ 国は狂い 雪の降る白 紅となる

青年も剣振るうものの
それは彼の望まないこと
彼の愛しき人も 兄に怯え 王に脅え
青年だけを やがて頼るようになり…
けれど狂いだす国を 止めることはできず…

雪の降る 遠い北の向うの国
逆賊という汚辱に塗れた 若き青年がいた

狂う国 鎮めよう そう思い 青年は
愛し合う 人と泣き 別れ言い 手を離し
ただ独り 我が俤な 横暴な 王に向かい
剣振るい 王倒す 叛乱の 物語

銀に煌く 数々の刃
積もりに積もった 怒りの矛先
青年に続く 数多の民

王宮囲み 玉座を囲み 王を囲み
青年は 彼に刃向けつつも

「避けられないけれども 避けたかった…」

涙に暮れつつも 彼の首へと…

紅を…

紅に染まった 彼の頬 涙の筋 つと伝い
愛しい人 愛しい家族 愛しい国 愛しい王
それら全て 彼は失い
彼の誉れ 彼の武勲 彼の功績 彼の信頼
それら全て 彼は亡くし
鎖に縛められ ただ独り

紅に染まった

愛しい人 ふと浮かぶも それはもう戻らない過去
遠く離れた恋の味
互いに知らないところで 互いに涙に臥せるも
平行な想いは 決して交わらない
錆びた世の雁字搦めな所為で
儚い愛は 終焉を告げた

王族は 権威を失い されど命を永らえた
王族は 革命を認めるも 青年を逆賊とし 処刑を宣告した
かつて彼が 国を支える者だったと知りつつも
彼の行為が 国のため 正しいことであると知りつつも

連行が 行われ 処刑場 階段を
青年は ただ登り ちらと見た 愛す人
ただ一人 想い馳せ 悲しみを 目に宿し
ギロチンに 捧げられ 目を閉じた 物語

雪の降る 遠い北の向うの国
今はもう 既に廃墟

I・深淵の青年（後書き）

嗚呼、所詮すべては移ろぎ、儚く散ってゆく。

II・狼戾の科学者

雪の降る 遠い北の向うの国

あらゆる科学を極めた 一人の男がいた

その国は ある一人の青年によって革命をした国

その国は 王族の命を約束に革命をした国

その国に 一人の科学者が野心を持つ

その国で 一人の科学者が可能性を見出す

彼は泥から妙薬を作り

彼は石を黄金に変え

彼は花を宝石にし

彼はまやかして人を弄ぶ 科学の頂点に立つ男

そんな彼が夢見ているのは 誰も挑戦したことのない果ての科学

技術で新たな国を目指す人々から支援を受け ただ一人で

錬金術の先を見つめる

それは たとえ神でも触れてはいけないこととも知らず

雪の降る 遠い北の向うの国

異質の魔女を生み出した 一人の異端者がいた

そう 彼の望みは 人造の命

草や水や鋼鉄から

果たして人は生み出せるのかと

技術に驕る科学者は 技術に盲目になった科学者は

その全ての知識を使い 一人の女を生み出した

彼女の瞳は 硝子から
彼女の髪は 風と草から
彼女の肌は 絹綾から
彼女の臓器は 泥と砂から

けれど彼女は魔女だった
異質なものから生み出された 異質なものの持つ魔女だった
彼女は無知ゆえ 力を持て余す
彼女は無垢ゆえ 何も知らない
娘がその手で何かを触れば
それはたちまち灰と化した
娘がその声で何かを捕まえれば
それはたちまち石となった
それは次第に恐ろしいものへと 科学者にさえ抑えられないものへと
と
変わってゆく…

人々は怒りに身を震わせる
何故 そんな恐ろしい生き物を造り上げた
何故 自分たちはそんな奴を支援した
彼は詐欺師だ 彼は悪魔だ 異端者だ
そう言つて 掌を返し
科学者は一人 身を隠す…
科学者は一人 魔女滅ぼす術を捜す…

自分の過ちのために

雪の降る 遠い北の向うの国
威厳を失い死に絶えた 愚かな一族がいた

魔女は恐れを知らない故に
次々と踊った 次々と歌った
彼女を鎮めるべく唸りをあげて襲い掛かる矢も弾も
彼女の前では灰になる 石になる
無機質な色 ガラクタと化す

彼女は踊り 家を亡くした
彼女は歩き 路を崩した
彼女は笑い 木々を枯らした
彼女は歌い 命を消した

もはや革命どころではない もはや新しい国家どころではない
人々は怒りすら恐怖に変え 次々と舟に飛び乗った

哀れなのは王族と科学者

王族は城に監禁の身となっており

科学者は皆から罵られる身となっており

誰からも思い出されはしなかったのだ

科学者は悔いの涙を流す 懺悔の言葉を叫ぶ

魔女を生み出した罪の その穢れに身を掻き毟る

けれど 時は決して戻らないもの

運命であり 必然である 冷酷な定め

やがて魔女は科学者の思いも知らず その声震わせ

何も知らない無垢のまま 城へと足を踏み入れた

魔女は足を踏み入れ 珍しい王宮の様子に目を輝かせる
そして次々とその素晴らしさを称えはじめる

けれど その声は呪いの言葉

その輝きは破壊の光

彼女が見るたび それはつまらないガラクタになる

彼女がほめるたび それは塵の如き灰になる
魔女は不思議に思い そして不満足に怒り
新しいものを求め より奥深くへと入っていった

叫び声 泣き声 許しを請う声
すべて王族たちの叫ぶ声
嗚呼

かつての王族の威厳 どこにある
かつての逆賊を肅清し 堂々と権力を降りたその冷静さ どこにある

革命の民すら恐れをなして処刑できなかった一族は
一体その強さをどこに置き去りにした

彼らはたちまち 石になる 灰になる
叫び声 泣き声 許しを請う声
それらすべてが 石になる 灰になる…
すべては魔女の所為で

雪の降る 遠い北の向うの国
ただ一人死なずにいた 一人の娘がいた

魔女が部屋を渡れば
その部屋は輝きを失う
魔女が声を轟かせれば
その人は皆崩れてしまう
けれど

魔女はただ一人
その人だけは 石にも灰にもできなかった

彼女はかつての王女で 国王の妹で

無邪気で哀れな美しい娘

愛する人を失った娘

だから 彼女は魔女など恐れない

もうとつくに 絶望の底までを知っているから

だから 彼女は魔女から逃げはしない

もうとつくに 逃げた所為で苦しい思いをしていたから

けれど

彼女は……

無垢で 自分の所業を何もわかっていない娘は

異質の魔女は

ただ閉ざされている扉を開けてみたい故に

王女の部屋へと足を踏み入れた

刹那 灰色へと 硬い無機質な石へと変わる部屋

魔女は其処に 美しい娘を見つける

興味をもち 歩こうと 思った

けれど

彼女は……

突然 響く足音 石を駆ける 男の足音

そう 未だ灰と朽ちていない 科学者

彼は叫ぶ

これ以上犠牲を出すのはやめてくれ、と……

彼は叫ぶ

俺の命を絶やして お前を還す、と……

俺が死ねば お前を繋いでいた力は失せて

俺が石になれば お前は再び元の姿に戻るから、と……

その声に振り向く魔女
美しい硝子の瞳

それは残酷にも 彼女が慕い 唯一従ってきた人さえも変える
その目を直に受け止めて
ついに 科学者は

魔女の目の前で 灰色に還った

それを見て 王女は震える
自分もあなってしまうのかと 思い
そして 意識が遠のくのを感じる
自分はあなってしまうのかと 絶望し

けれど

彼女は……

科学者が崩れ落ちた刹那

魔女の髪は風と草に

魔女の肌は絹綾に

魔女の瞳は硝子に

魔女の臓器は泥と砂に

そう 科学の根源を失った その異質な生き物は
繋ぎ合わせていたものを失い 再び自然へ還った

そして王女は その意識を混沌としたまま
深い深い 眠りに落ちた

王女ただ一人だけは 魔女を見 声を聞きつつも
石にも灰にも ならなかったのである

それはかつて 彼女が一人の青年と真実の愛を育んだから
それはかつて 彼女を愛した青年の想いがその身を守ったから
そう たった一人の真実の愛が 彼女の鎧となり
そう たった一人の真実の絆が 彼女の盾となり
王女だけは 石にならず 灰にならず
いつ果てるともわからない 深い混沌の眠りに落ちたのである

その後 王女がどうなったか
科学者や魔女がどうなったか
それらは此処に記されていない
だが 王女の物語はまた別の場所で
謡われていると 聞いている

雪の降る 遠い北の向うの国
今やもう 忘却に沈んだ都

II・狼戾の科学者（後書き）

国は如何にして滅びたか。

III・呪詛の娘

……貴方八何処二行ッテシマッタノ？……

その昔 草木の中から

科学者によって生み出された 一人の娘がいた

彼女はかつて人間の 進歩の頂点だと

褒め称えられ 科学者の元で 育ったが

異質なものから生み出された

彼女は 異質の娘＝魔女

眠りし力を秘める 決して人間にはなり得ない生き物

……はじめまして。起きれるかい？……

………貴方八誰？……

……俺かい？俺は、君を生み出した科学者さ……

……カガクシャ？……

……そう、科学者だよ。よかった、喋れるね。それに、歩けるじゃないか！……

……そうそう、上手だよ。すごいよ、その調子！……

……貴方八何故笑ウノ？……

……嬉しいからだよ……

……嬉シイ？……ソレハ、何？……

「……気持ちのひとつだよ。僕は、君が成長していくのが、嬉しい。
嬉しいと、笑顔になれる。」

だから、僕は笑うんだ……

「……私モ、笑ッテイ？……
……もちろんだよ！……」

彼女は科学者を慕う 実の親のように信じる
ただ何も知らない 無垢な娘は
それが何を生み出すかとも知らずに 心地よく笑う

けれど その刹那

どこか遠くで 花が石になり
どこか知らない場所で 蛙が灰になった

「……貴方八何処ニ逝ッテシマッタノ？……」

娘は笑う 娘は歌う

科学者がそれを教えてくれたから
科学者の気持ちを理解したかったから
けれど それは呪われた行為
されど それは破滅へ向かう行為
彼女が望もうと望ままいと それは定められた事

「……笑ウツテ、気持ちイイコトネ！踊ルノモ、トツテモ楽シイ！
……」

………
………笑ワナイノ？………

………すまない。………すべて、俺のせいだ………！………

………貴方ハ笑ワナイノ？何故、笑ワナイノ！？………

娘は科学者を喜ばせたくて

彼が笑ってくれそうなもの 見たら幸せになりそうなものを探し始める

けれど どんなに美しいものも

彼女の目に晒されれば 灰になる 石になる

無機質な ガラクタになってしまう

だけど何も知らずに生み出された異質な魔女故に

彼女はそれがわからない 何故そうなるかが理解できない

だから 飽かず探し続ける

それが破壊の行為であるとも知らず

それが科学者の嘆きになることも知らず

………ドウスレバ貴方ヲ喜バセルコトガデキルノ！？………

………貴方ハ何処ニイルノ！？………

………俺のせいで、君も俺も、国も悲しむことになってしまった

………ソレハ、ドウイウコト？………

「俺は、越えてはいけないものを越えてしまったんだ！してはいけないことを

してしまったんだ！」

「私ノ所為？」

「違う、俺の所為だよ！この腕がいけないんだ、君は悪くない

「けれど……君は、滅ぼさないとはいけない。俺と一緒に……」

魔女は科学者を見る

何故そうしなければいけないのかもわからずに
そして 彼女が叫んでも 嘆きの声を上げても
それは止めることができず

科学者は石と化し 二度と蘇ることはなかった

「貴方は何処に逝ってしまっただろう？」

「天国？地獄？……どちらデモイ、貴方と一緒に場所へ逝きたい」

「何故私に自然の中で生き続けなけりゃいけないの！？」

「私に人間ダッタラ、死ネタノ？私が魔女デナケレバ、貴方も私に幸せダッタノ？」

……ワカラナイ……私二八、ワカラナイ……

魔女がどれだけ願っても 彼女は所詮自然の産物
その形が崩れても その形が散り散りになっても
土に還ることは無く

今でもいつまでも何処までも 科学者を慕い続け 今なお自然の中
で泣いている

雪の降る 遠い北の向うの国
かつて決して実ることのない 儚い想いがあつた

III・呪詛の娘（後書き）

魔女には魔女なりの想いがあったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678i/>

或る北国の物語

2010年10月8日11時28分発行